

込められた「祈り」

神幸祭と伝統の神事

山々が紅く色づき始め、稲穂実る10月。金田・神崎地区では2週にわたり2つの神社の神幸祭が行われ、地域は祭り一色に染まる。獅子の音色が響く中、獅子が舞い、豪華絢爛な山笠が町内を練り歩く。「五穀豊穣」「無病息災」。その伝統にはいつの時代も変わらない人々の祈りが込められている。



神事一つひとつに理由がある。



農耕を主とする我が国は、季節ごとの「祈り」と生きてきました。春は豊作を祈り、夏は害虫被害や水害よけを願ひ、秋は収穫に感謝し、冬は一年の無事を喜び、生きる力を蓄える。移ろう四季それぞれに思いがあり、それが祭りという形で今に受け継がれています。収穫への感謝を込めた秋の神幸祭。豊作の喜びと健康への感謝を地域ごとで祝うのがこの神幸祭であり、山笠、獅子舞、巫女舞などの神事が奉納されます。生活に密着している祭りだからこそ、人々の心を動かし、絶えず地域の楽しみであり続けているのです。

飯土井神社と稲荷神社の両神事を担う阿部重信宮司は、「山笠の華やかさに目を奪われがちですが、神事には全て行う理由があります。先人たちが大切にしてきた思いを感じ、祭りに携わる全員が伝統をつないでいる自覚をさらに共有してほしい」と力を込めました。かつて獅子方は、学校の早退もできた神幸祭。しかし今は少子化による担い手不足など、時代に合わせてその姿は変化しています。それでも祭りはどんなに厳しい社会情勢の中でも続き、幾度もの困難や途絶の危機を乗り越え、今に至っています。人の思いがつかないできた伝統は、かけがえない守るべきものとして、地域に根付いています。

祭人の声

山笠制作に魅せられて

町部山笠(剪定士) 兼本修さん



若い頃は全く祭りに興味がありませんでしたが、地域の役員がきっかけで山笠制作を手伝うようになりました。今では山笠の杉壁は全て私が作っています。やはり、ここに獅子方が乗った姿を見ることがうれしいですね。一つの山笠を心一つに作り上げる。そんな関わりや楽しみもあるんですよ。



←「ここに気づいてもらえたらうれしい」。兼本さんのこだわりは竹を削り描く模様。

→獅子方が長時間足をかける杉壁。丁寧に滑らかに仕上げます。



↑戦後間もない頃、材料不足の中、松の木1本だけで建立した山笠。

先人から継ぐ命への感謝

山笠

福 智の山笠は城の屋根のような破風が特徴で「屋形削り」と呼ばれる。以前は稲穂をかたどった馬簾が飾られていたが、時代とともに博多などの影響を受け豪華な人形山となり、祭りを彩っている。



旗持ち行列

参 勤交代の大名行列を模した行列が神輿につきそう。本来は槍や弓、旗など約50人の順番があるが、今では進みやすいように調整されている。赤・青の鬼が先導し、鬼に泣く子どもは強く育つとされる。



神輿

神 輿は神が各地域を巡行する乗り物の役目を担う。神社から御旅所までの行程を「お下り」その逆を「お上り」と呼ぶ。宮司が神輿に神をのせる儀式では周囲を隠し「見た者は目が腐る」と伝えられている。



獅子舞

雄 獅子と雌獅子の2体での舞い。稲荷神社神幸祭では稚児舞とともに氏子である金田一区の青年が神社と御旅所で奉納する。獅子は邪気を食べるとされ、子の成長を願い、頭を獅子にかませるのが恒例。

